自民清風会　会長：山崎　泰信　印

# 調査研究(研修)視察報告書

報告者：野村康治

| | |
|---|---|
| 視　察　日 | 平成２７年６月２２日（月） |
| 視 察 内 容 | 農協改革の取り組みについて |
| 視　察　者 | 野村康治　川上　守　杉浦久直 |

今や大きな社会問題となってきた人口減少問題を少しでも理解していくのには、地方の農業の活性化を図ることが最も大切な一つであると考える。
そこで、安倍内閣が地方創生・農協改革を大きく打ち出した中で、とりわけ高い評価を受けている、農協改革をすでに 27 年前から着手し、実績を上げている「越前たけふ農協」を視察した。

改革 1　全ての資材または産品を直接製造会社、または大手の商社から仕入れをする仕組みにした。
2　全国一律の米の流通ルートから離脱し、全国で初めて全ての米を独自販売した「独自ルートの開発」
3　米を農家から食味計と整粒計を使い「数値化」し、高い評価の米は高く買う。コシヒカリ 60 kg当 17000 円　標準 15000 円　（全国標準価格　9000 円）
4　「日本晴」という品種を「すし米」として生産販売に成功。
5　海外輸出も積極的に行い販売実績を上げた。

富田隆組合長の話
農協の職員や関係業者に依頼し、農家の庭先まで出かけ、集荷し販売したのが農家の心を取り込めたのが始まりで、農協が農家の信頼を得るという構図が出来上がった結果だと語ってくれた。

（別紙で資料添付）

［感想・岡崎市への反映］

本市も現在は人口がやや増加傾向にあるが、10 年後には明らかに減少傾向になるわけで、とりわけ農業人口が減り続け、農家が崩壊し限界集落化する状況が目に見えている。それを少しでも防ぐ方向を考えていくべきである。

それには、農家が本当に「儲かる農業」ができるのか否かにかかっている。そこで、農協職員にも「越前たけふ」の視察に参加してもらった。本当の意味で、農家が自分たちの農協だといえる農協として信頼できる体制づくりや経営について、真剣に取り組む必要があると強く感じた。

農家が 25％も高い資材や肥料を買っているようでは、農家が農協を信頼しない。地域農協が意識改革をしなければならず、全農を守ろうとするだけでは、来るべき TPP 交渉は必ずしも都合の良い結果が出るとは限らない。自らが反省と努力をすることによってしか将来の農業はない。したがって、そのために市としては、そうした努力をしようとする農家や団体には積極的に政策的支援をすべきであると考える。

自民清風会　会長　山崎泰信　印

# 調査研究（研修）視察報告書

報告者：杉浦　久直

| | |
|---|---|
| 視　察　日 | 平成２７年６月２３日（火） |
| 視察内容 | エコミュージアム推進事業（わがまち魅力発酵事業）について |
| 視　察　者 | 野村康治、川上守、杉浦久直 |

＜勝山市の概要＞

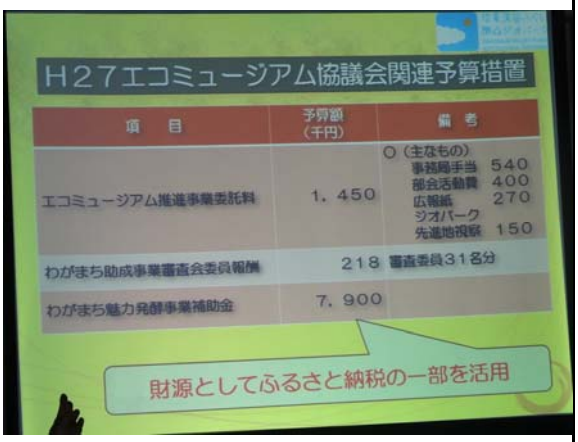
福井県の北東部、福井駅から、えちぜん鉄道で５０分、山々に囲まれた市街地は九頭竜川が形成した河岸段丘に位置する。繊維産業、人絹織物を基幹産業として発展した勝山市は、恐竜化石発掘量が日本一の恐竜のまちでもある。
面積 253.88 ㎢　人口 24,679 人（平成２７年 5 月末現在）

＜エコミュージアム＞

エコミュージアムとは 1960 年代にフランスで生まれた「ひとつの地域全体を博物館」とするまちづくりの考え方であり、勝山市がこのエコミュージアムによって目指すのは「ふるさとルネッサンス」である。勝山市独自の自然や風土、伝統、歴史、文化、コミュニティなどの地域の力を再発見することによって、地域の誇りにつながり、地域の伝統、文化の継承・保存や地域環境の保全、地域住民の自主性を喚起し、いつまでも住み続けたい「選択されるふるさと」を目指すものである。

＜勝山市におけるエコミュージアムの展開＞

勝山市では平成 12 年度からエコミュージアムによるまちづくりを推進している。市長が勝山市の「復興」と「再生」を目指し「ふるさとルネサンス」の理念を政策の柱として掲げ、その理念実現のための施策がエコミュージアムによるまちづくりであり、勝山市エコミュージアム協議会が結成された。




＜エコミュージアム協議会の構成＞

平成 15 年 6 月に結成されたエコミュージアム協議会は、市民と行政との協働でのまちづくりを目指すものであり、現在、市内のまちづくり団体など 30 団体の代表者と個人会員の 38 名で構成されている。総会となる全体会が年に 3～4 回開催されるほか、核となる企画委員会で全体事業の企画や「わがまち○○事業」の総括等を行い、その下の５つの部会（広報部会、きらり・シティ部会、自然環境部会、恐竜のまち推進部会、ちゃまトク部会がそれぞれの特色を活かした活動を行っている。

＜わがまち魅力発酵事業＞

市民が主体的に行う地域づくり活動に対して３カ年ごとに内容と名称を見直しながら、「わがまち○○事業」が行われてきた。平成 14 年度から 16 年度は「わがまちげんき発掘事業」として、合併前からの旧町区 10 地区のまちづくり団体に一律定額の活動費補助として年間 100 万円を交付し、各地域の歴史遺産、自然遺産及び産業遺産の調査を行い、マップづくりや歴史ウォーキングなどで地域の宝の再認識を行った。次に、17 年度から 19 年度は、「わがまちげんき創造事業」として、各地区まちづくり団体に加え市民団体にも助成の枠を広げ、公開審査の結果 21 団体に 220 万円の助成を行った。その後も、20～22 年度は「わがまちげんき発展事業」、23～25 年度は「わがまち魅力醸成事業、」そして 26 年度からは「わがまち魅力発酵事業」として新たな若者や女性団体の参加を促す取り組みを進めている。13 年間で 272 事業、9,568 万円の補助金の交付を行い、特産品の商品化や、地域の遺産の掘り起こし、コミュニティビジネスの

創出にも発展している。

＜課題＞

15 年間かけて推進してきたエコミュージアムのノウハウを活かして、「小さくてもキラリと光る誇りと活力に満ちたふるさと勝山」への取り組みを更に推進していくために、「地域間、団体間の連携の強化」、「さらなる参加意識の向上」、「市職員 5 名、民間 6 名で構成されているエコミュージアム協議会の組織強化（NPO 法人化）」などが課題として挙げられる。また、勝山市は 21 年に「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」として認定された。エコミュージアムという取り組みとジオパークとの理念、方向性は同一であるが、言葉が二つあるという状況をあらためるため、「ジオパークまちづくり」へと統一して、市民主体のまちづくり活動の継続した取り組みを続けていく。

〔感想・岡崎市への反映〕

勝山市は、人口２万５千人弱の中山間地域に位置する市であり、かつては繊維産業で栄えていた。市制施行の 61 年前は３万５千人の人口であったとのことなので、人口減少が大きな課題となっている市である。そうした中で、観光入込客数は年間 150 万人前後であったものが 26 年度には 171 万人と大きく増加してきている。勝山市の大きな観光資源としては、西日本最大級のスキー場のスキージャム勝山と、日本三大恐竜博物館である福井県立恐竜博物館がある。今回の視察のエコミュージアム推進事業は平成 12 年度に開催され 80 万人を集客した恐竜エキスポふくい 2000 を契機として、その成果をどうまちづくりに活かしていくかという課題に対する回答として行われてきたものである。観光を産業として捉えた時に、まずは、勝山市の場合、最大のセールスポイントとなる恐竜化石の発掘量日本一という、自然遺産を磨き上げることが必要であるが、それに加えて、その集客力をどう周辺に波及させ、滞在時間を延ばして、消費をしてもらうか、リピーターになってもらうかが重要である。エコミュージアム推進事業では、それぞれの地域の様々な自然、文化、歴史などの遺産を市民自らが再発見し魅力を増進させるということで、市民が地域に誇りを持ち「地域全体が博物館」というまちづくりを行っていくということで、地域の魅力増進により、観光産業に大きく資するものということができる。

岡崎市においては、本平成 27 年は家康公 400 年祭、28 年度は市制施行 100 周年という大きな節目を迎える中、市長により観光を本市の新たな産業の柱にしていくという方針が示されている。そのためのシティプロモーションとして「岡崎ルネサンス」をコンセプトに、新たな視線の魅力づくりとして「資産の現代化値化」、「岡崎の顔づくり」、「地域愛の醸成」、効果的な情報発信として「市民による主体的な発信活動の土壌づくり」、「本市の魅力情報が内外に拡散する仕掛けづくり」に取り組んでいる。そうした中で市民、企業、団体など市内で活動する様々な主体が岡崎の魅力づくりを行う「新世紀岡崎チャレンジ 100」事業が行われる。

チャレンジ 100 は単年度の補助活動ということで、28 年度にそれぞれ実施されることになるが、本市においては他に、市民活動団体に対しては、岡崎市民公益活動助成金という形で、自立支援型で上限 5 万円、活動支援型で上限 20 万円の補助を、地縁組織に対しては、地域協働推進事業費補助金という形で、各学区上限 20 万円の補助を行っている。

本市で行うそれぞれの補助金の、その目的は異なるものであるかもしれないが、まずは共通して、それぞれの活動が市民からしっかり見えるものである必要があると考える。勝山市の「わがまち魅力発酵事業」においては、まずその審査が公開で行われ、活動報告会も開催されている。本市でも市民公益活動助成金事業では公開審査と、成果報告が行なわれているが、地域協働事業推進事業費補助金についてはそうなっていない。チャレンジ 100 はこれからの事業であるが、「見える化」の推進は必要不可欠である。それとともに、チャレンジ 100 で新たに作られた本市の魅力をどう継続させていくかも課題であると考える。勝山市においては 15 年に渡り続けてくる中で、当初は、各地域の団体への一律補助であったものが、市民団体を加え、さらに新たな団体への参加を促しているとのことであり、本市での魅力づくり活動への補助をどう継続していくか、単年度で終わることなく、かといって補助金に頼って継続していくという活動にならないような、活動を継続させていく仕組みづくりへの支援が求められると考える。

いずれにせよ、本市のシティプロモーション「岡崎ルネサンス」の取り組みはまだ始まったところであり、息の長い取り組みが求められる。本市が観光を新たな産業の柱としていくためには、市民の意識の変化も求められ、勝山市のように市全体が博物館であり、市民全員が学芸員というところまでは難しいがかもしれないが、市民がこの岡崎、自分の住む地域に誇りを持ち、積極的に情報発信をしていくような魅力的な地域づくりを行うための市民団体や、地域団体への活動補助は継続的に行っていく必要がある。